

北村透谷参考文献目録補遺（2）

鈴木 一 正

要 旨 本目録は、明治二十年代に活躍した詩人・評論家の北村透谷（一八六八―一八九四）の参考文献目録で、これまでに発表した六つの目録（凡例参照）に漏れた分と、それ以降の一年分（平成十八年）を加えたものである。

この六つの目録は、先行参考文献目録の増補改訂版というべきものであるが、本目録に収録した文献は、先行参考文献目録に未収載であり、新たに発掘した文献も多い。この六つの目録に本目録を合わせると、明治二十二年から平成十八年までの百十八年分の目録（発行年月順）となる。

凡 例

一、本目録は、これまで小生が作成した①「北村透谷参考文献目録—明治二十二年—昭和十九年—」（国文学研究資料館紀要）第27号、平13・3）、②「北村透谷参考文献目録—昭和二十一年—昭和五十年—」（国文学研究資料館紀要）第26号、平12・3）、③「北村透谷参考文献目録—昭和五十一年—平成九年—」（桶谷秀昭ほか編『透谷と現代—21世紀へのアプローチ』翰林書房、平10・5）、④「北村透谷参考文献目録 補遺（1）」（国文学研究資料館紀要）第28号、平14・2）、⑤「北村透谷参考文献目録—平成十年—平成十五年—」（北村透谷研究会編『北村透谷とは何か』笠間書院、平16・5）、⑥「北村透谷主要参考文献目録」（新保祐司編『北村透谷—《批評》とは何か』国文学解釈と鑑賞）別冊—至文堂、平18・3）の六つの目録とそれ以降の一年分（平成十八年）を加えたものである。

一、本目録の構成は、「1 明治二十二年—平成十七年 補遺」（①—⑥の遺漏分）、「2 平成十八年」（⑥以降の分）から成る。

一、排列は、月単位で発行順に並べた。同月内は、著者名の五十音順とし、雑誌等で同時に複数の論文掲載の場合は、掲載順とした。ただし、週刊紙（誌）、日刊紙は、同月内の後に、月日順に並べた。なお、戦前分について、わかるものは発行年月日まで記入し、発行順に並べた。

一、タイトルは、原則として目次ではなく、本文のものを採用した。副題は、なるべく採用するようにした。なお、副題の表記は、記載のとおりとした。

一、雑誌等の巻号は、なるべく採用するよう努めた。

一、連載・分載の場合は、一括で記入し、著者名の上に*印を付した。

一、単行本は『』、雑誌等は「」で示し、叢書名・特集名等、補足的事項は〈〉を用いた。また無署名の場合は、———で表示した。その他、必要に応じて注記した。

一、原則として、雑誌等の「初出」によった。初出不明、未確認の場合は、単行本所収時のものを記載した。

1 明治二十二年〜平成十七年 補遺

【明治期】

雲峯生 「宿魂鏡」透谷子著〈批評〉〔同志社文学〕

第61号、明26・1・23)「国民の友新年附録」評

「文学界」第二号〈近刊雑誌〉(「青年文学」

第17号、明26・3・20)

「評論」〈新刊雑誌 文界現象〉(「早稲田文学」

第38号、明26・4・25)「明治文学管見」評を含む

「文学界」と「評論」と〈新刊雑誌 文界現

象〉(「早稲田文学」第39号、明26・5・10)

楽夢生 「評論」第三号〈新刊雑誌〉(「思想」第1号、

明26・6・3)「明治文学管見三」評

「文学界」(第五号)〈新刊雑誌 文界現象〉

(「早稲田文学」第41号、明26・6・10)「頑執妄排の

弊」「人生の意義」「賤事業弁」の評を含む

S. H. 情死論(戸川氏が「桂川」の評のうち、北村

透谷)〈新刊雑誌 文界現象〉(「早稲田文学」第45号、

明26・8・10)

「エマルソン」〈最近出版書〉(「読売新聞」明

27・5・7)

滄浪漁長 透谷逝(おもかげ)〔読売新聞〕明27・5・

21) 漢詩

小島島水 山王台放語(「文庫」第15巻第4号、明33・

9・1)「詩人透谷」を含む。↓「小島島水全集」第

2巻、大修館書店、昭58・5

玄々子 文士雅号譚(佐藤儀助編『文壇楽屋観』新声

社、明34・7・13)

久保天随 北村透谷(久保天随編『詳註細評 現代名家

文選』金刺芳流堂、明41・10・11)「鬼心非鬼心」(「処

女の純潔を論ず」を収録

三島霜川 私の文壇に接触した時分(「新潮」第13巻第

4号、明43・10・1)「文壇の風潮動く―透谷の死」

を含む

【大正期】

生方敏郎 流行児の盛衰と文壇諸団体の勢力消長史―団

体評論第一―(「人物評論」(「新日本」第4巻第5号、

大3・4・3)「文学界派と樋口一葉」を含む

若山牧水 透谷、独歩、一葉(余が好める秋の描写)

(「文章倶楽部」第1巻第6号、大5・10・1)

馬場孤蝶 文壇二十五年 藤村氏の『春』に描かれたる

人々(「中央文学」第1年第6号、大6・9・1)

稲毛詛風 最近思想の変遷及び主要人物(「雄弁」第10

巻第1号、大8・1・1)

高山生 文壇遺跡めぐり(「中央文学」第5年第4号、

大10・4・1)「北村透谷の家」を含む

黒沢隆信 自然主義文学について/浪漫文学に関して

(「近代文学の教養」忠誠堂、大14・6・10)

松本龍之助 北村透谷(『明治大正 文学美術人名辞書』

立川書店、大15・4・5）昭55・5に国書刊行会から復刻版

* 山花袋 明治の小説―自然主義と写実主義―（『日本文学講座』第1・3巻、新潮社、大15・11・27、12・20、昭2・1・20）

【昭和期（戦前）】

斎藤昌三 透谷の佚文（『島崎藤村集』〈現代日本文学全集第16編〉附録、改造社、昭2・3・8）〈改造社文学月報〉第3号）↓青山毅編『改造社文学月報』〈昭和期文学・思想文献資料集成第5輯〉五月書房、平2・6

若林のぼる 反故の中より―透谷のこと―（『土上』第

6巻第5号、昭2・5・1）

* 日夏耿之介 明治新詩の展開（『日本文学講座』第7、

8巻、新潮社、昭2・5・30、7・10）

斎藤清衛 解説（斎藤清衛編『文芸鑑賞読本 明治篇』

星野書店、昭2・12・20）「一夕観」「螢」を収録

三浦圭三 北村透谷／透谷全集（『日本文学辞典』文教

書院・大阪宝文館、昭3・3・5）

日夏耿之介 「文学界」運動（『明治大正詩史』巻上〈明治浪漫詩展開の顛末〉、新潮社、昭4・1・15）第3

章「草創後期」のうち

北村透谷〈明治文壇人名録〉（『月刊日本文学』

第2巻第4号、昭7・3・1）〈特輯 明治文学大観号〉

新屋敷幸繁・峯岸義秋 新体詩（『日本文学概論』大明

堂、昭7・6・22）第4章「詩」のうち

比屋根安定 近世日本文学における基督教（『新興基督教』第23号、昭7・8・1）

戸川秋骨 故人の原稿その他（『書物展望』第2巻第10号、昭7・10・1）

斎藤 潔 日本基督教近代詩歌史（三）（『新興基督教』第29号、昭8・2・1）「国民之友」と「女学雑誌」を取り上げる

戸川秋骨 北村透谷君と私（『都会情景』第一書房、昭8・12・10）↓坪内祐三編『戸川秋骨 人物肖像集』みすず書房、平16・3

神崎 清 「透谷の碑」について（『明治文学研究』第1巻第5号、昭9・5・1）

北村透谷（木村毅監修『日本人名辞典』〈小辞典全集第9巻〉非凡閣、昭9・10・22）

神崎 清 透谷の逸詩 一点星（『詩精神』第2巻第1号、昭10・1・1）

島 大和 「文学界」より「新詩社」への展開―新体詩を中心として―（『立命館文学』第2巻第6号、昭10・6・1）

土方定一 明治浪漫主義文学に於ける新詩社の位置（同右）

大植四郎 北村透谷（大植四郎編『国民過去帳』大植四郎、昭10・12・25）昭46・11に東京美術から新訂版

（『明治過去帳 物故人名辞典』）

- 北村透谷 (菊池寛監修、日本英雄伝編纂所『日本英雄伝』第3巻、非凡閣、昭11・4・17)
- 武藤直治・日夏耿之介 北村透谷 (藤村作編『日本文学大辞典』第2巻、新潮社、昭11・6・21)
- 平田禿木 文学界の頃 (『帝国大学新聞』昭12・2・8)
- 本間久雄 ゲーテと日本―ゲーテ百年祭に因みて―/日本文学と英文学 (『わが鑑賞の世界』〈学芸随筆 第7巻〉東宛書房、昭12・3・18)
- 風巻景次郎 北村透谷 (『明治大正詩人略伝』 (風巻景次郎編『明治大正新詩選』白帝社、昭12・4・18)「ほたる」「蝶のゆくへ」「雙蝶のわかれ」「眠れる蝶」を収録)
- 村上浜吉 透谷 (『著者別』 (『明治文学書目』村上文庫、昭12・4・20) 昭51・7に飯塚書房、昭63・5に国書刊行会から復刻版)
- 石川 巖 明治文学稀書解題 (『日本古書通信』第86号、昭12・9・15)『楚囚之詩』『蓬萊曲』を含む
- 芹沢 寛 「文学界」の人々 (『文学の道』ルミノ出版社、昭13・1・16)
- 富田 彬 北村透谷とエマソン (『英米文学』第12号、昭15・5・25) ↓『米英文学と日本文学』續文堂、昭23・11
- 〔尾島真治〕 現世に栄を望むな (『評論』 (『基督知識』第112号、昭15・9・9)
- 尾島真治 北村透谷と基督教 (『興文』昭15・11)
- 青野季吉 明治文学史 (佐藤春夫・宇野浩二編『近代日本文学研究 明治文学作家論』上巻、小学館、昭18・3・30)
- 藤原喜代蔵 個人主義の勃興 (『明治・大正・昭和 教育思想学説人物史』第2巻 (『明治後期篇』、東亜政経社、昭18・4・10)「国民的自覚より個人的自覚へ」を含む)
- 尾島真治 巨摩嶽麓集序 (尾島真治・斎藤潔編『巨摩嶽麓集 国学者桜井義令詠草』信頼舎、昭19・3・8)
- 〔昭和期 (戦後)〕
- 荒木良雄 「硯友社」と「文学界」紅葉と透谷 (『現代文学の眺望』太陽文庫、昭23・1)
- 小原 元 島崎藤村「春」 (小原元編『青春群像』真善美社、昭23・5)
- 長谷川泉 日本近代文学史素描 (『国語と国文学』第26巻第4号、昭24・4)
- 笹淵友一 近代日本文学と基督教 (山宮允編『日本現代詩大系』第1巻月報、河出書房、昭25・9)
- 岡 一男 浪漫主義の時代―伝統詩歌の革新と近代詩の確立― (『近代詩歌―展望と評釈―』学燈社、昭26・9)「北村透谷」を含む。「雙蝶のわかれ」を収録
- 本間久雄 北村透谷―透谷とバイロン― (『明治文学作家論』早稲田大学出版部、昭26・10)
- 坂本 浩 浪漫主義思潮の展開 (片岡良一編『近代日本文学の思潮と流派』 (上) (『近代日本文学講座3』河出

書房、昭26・12)

神保光太郎 解説(神保光太郎・笹沢美明編『日本詩人全集』第1巻〈明治篇1〉、〈創元文庫〉創元社、昭27・

8)「楚囚之詩」「はたる」「蝶のゆくへ」「雙蝶のわかれ」「眠れる蝶」を収録

村井勇吉 忘れられた詩人の悲劇―クリスチャン・D・グラッペー(「人文論究」第3巻第4号、昭27・12)「グラッペーと透谷」を含む

北村透谷(戸田貞一編『新編人名事典』国民図書刊行会、昭28・4)

高坂正顕 明治精神形成とキリスト教―明治二十年代の精神革命と北村透谷の場合について―(「福音と世界」第8巻第10号、昭28・10)

伊藤 整 東京専門学校の創立／透谷が入学する／大阪事件と北村透谷(『日本文壇史』1〈開化期の人々〉、講談社、昭28・11) 平6・12に講談社文芸文庫版
片桐楨子 浪漫主義と「文学界」(「ふじ」第4号、昭30・3)

小田切秀雄 北村透谷(永積安明・猪野謙二編『国民の文学 近代篇』御茶の水書房、昭30・5)

田中 純 明治の青春期／蘆花の初恋(『文壇恋愛史』〈二時間文庫61〉新潮社、昭30・9)「島崎藤村の「春」

「明治の春期発動期」／「透谷に恋した女」を含む
益田道三『楚囚之詩』とThe Prisoner of Chillon
(「英語青年」第101巻第12号、昭30・12)

勝本清一郎 北村透谷(平凡社編『世界大百科事典』7、平凡社、昭31・4)

S・S「佐藤善也」ある夜の想い(「桜美文芸」第7号、昭32・6)「一夕観」の現代語訳。↓北村透谷研究会編『北村透谷とは何か』笠間書院、平16・5

編集部 年譜(『北村透谷全集』第1巻〈詩歌 翻訳〉、宝文館、昭32・7)

石丸 久 詩歌 詩(早稲田大学七十五周年記念出版委員会編『日本の近代文芸と早稲田大学』早稲田大学、昭32・10)第1章「創作活動」のうち

川副国基 評論 自然主義時代まで(同右)第1章「創作活動」のうち。↓『近代日本文学論』早稲田大学出版部、昭34・12

高坂正顕 『文学界』と女性の自覚／透谷における挫折の問題(開国百年記念文化事業会編『明治文化史』4〈思想・言論篇〉、洋々社、昭33・3) ↓「高坂正顕著作集」第7巻、理想社、昭44・2。『良心と至誠の精神史』燈影舎、平11・11

北村透谷／文学界(片岡良一編『岩波小辞典 日本文学―近代―』岩波書店、昭33・6)

伊藤 整 新しい作家と詩人たち(『近代日本の文学史』〈カッパ・ブックス〉光文社、昭33・9)「文学界」の人びと」を含む

木村 毅 エマソン之感化(『日米文学交流史の研究』講談社、昭35・5)「北村透谷」を含む

橋本義夫 透谷を憶う集い(「多摩文化」第5号、昭35・7)

坂本 浩 『伽羅枕』及び『新葉末集』(『学習本位の文芸評論』学燈社、昭36・8) 『伽羅枕』及び『新葉末集』(抄)を収録

藤井信男 人とことば―北村透谷と「情熱」―(『実践国語教育』第22巻第258号、昭36・12)

中村光夫 評論の時代―北村透谷を中心に―(『文学界』「明治文学史」〈筑摩叢書9〉筑摩書房、昭38・8) 第2章「明治中期」のうち。↓『中村光夫全集』第11巻、筑摩書房、昭48・3

関 良一 作家・作品解説(『近代詩』〈近代文学注釈大系〉有精堂出版、昭38・9) 『蓬萊曲(抄)』「眠れる蝶」を収録。頭注、補注を付す

川合道雄 『文学界』時代の基督教と基督教者の実態(『風雪』第1集、昭38・12) ↓『山月子回顧ノート』近代の文人・思想家たち―基督教心宗教団事務局出版部、昭40・7

中島洋一 北村透谷論(「基督教文化学会年報」No.11「現代思想と基督教」、昭39・1) 〈パネル・ディスカッション〉「近代日本文芸におけるキリスト教の受容―明治時代―」

武田寅雄 近代作家とキリスト教(同右)
木村鈴吉ほか著 『蓬萊曲』(北村透谷歿後七十周年記念公演プログラム)(出版者不明、昭39・6) 東京俳優

座劇場(昭39・6・2・8)、湯河原観光会館(昭39・6・10)で上演

村上一郎 北村透谷(『世界の思想家たち―人と名言―』〈現代教養文庫559〉社会思想社、昭41・3)

伊東一夫 明治二十年代の文学者における自然観の展開―藤村・湖処子・四迷・透谷を中心として―(『白山哲学』第4号、昭41・6)

小田切進 「文学界」(小田切進・平山城児『指向と研究 日本文学史』三省堂、昭42・5) 第V章「近代文学の確立と発展―近代」のうち

昭和五年に三十銭、いま八十万円の本「楚囚之詩」を売った人と買った人〈古書の話題〉(『山陽新聞』昭42・7・4朝刊)〈新聞記事〉

書庫にねむっていた逸品―北村透谷の「楚囚の詩」出雲の成瀬さん、三部を発見(『島根新聞』昭42・8・17)〈新聞記事〉

松永伍一 北村透谷の農民観(『日本農民詩史』上巻、法政大学出版局、昭42・10)

多田道太郎 解説(多田道太郎編『愛あるところ―恋愛と人生』青春の記録7―三一書房、昭43・3) 『石坂ミナへの手紙』を収録

小玉晃一 エマソンと明治、大正の文人たち〈英米作家の日本への影響11〉(『英語研究』第57巻第6号、昭43・6) ↓『比較文学ノート』笠間書院、昭50・1
相馬庸郎 近代文学者と「故郷」意識(『日本文学』第

17 卷第11号、昭43・11)

藤井松一 戦争観と平和観 (古田光ほか編『近代日本社会思想史Ⅰ』〈近代日本思想史大系1〉有斐閣、昭43・11) 「北村透谷における平和思想」(「キリスト教における〈戦争と平和〉のうち」を含む)

笹田友一 浪漫主義の成立と展開 (全国大学国語国文学会監修『講座日本文学』9 〈近代編Ⅰ〉、三省堂、昭44・4)

重松泰雄 近代批評の萌芽 (同右) 「透谷の評論」を含む

壺井繁治 近代詩の誕生と終焉 (伊藤信吉ほか編『詩とは何か』〈現代詩鑑賞講座Ⅰ〉角川書店、昭44・4)

「透谷と藤村」を含む。↓『壺井繁治全集』別巻、青磁社、平1・8

*手塚竜麿 明治女学校で教えた人びと (「巖本」第24・25、26・27号、昭44・9、12)

中村光夫 出会い―岩野泡鳴の手記― (「波」第3巻第3号、昭44・9) 創作

中村博保 修辞文の世界と近代リアリズムの形成 (早大俳諧研究会編『近世文学論叢』〈中村俊定先生古希記念〉桜楓社、昭45・4) 「徳川氏時代の平民的理想」

「松島に於て芭蕉翁を読む」を取り上げる

佐渡谷重信 日本におけるラルフ・W・エマソン (一) (「西南学院大学英語文学論集」第12巻第1号、昭46・7) 「北村透谷」を含む。(二)は第12巻第2号 (昭46・

12)、(三)は第12巻第3号 (昭47・3)

畑 有三 近代文学の黎明 (「国文学」第16巻第16号、昭46・12、臨時増刊〈近代日本文学の歴史〉)

田畑 忍 詩人・北村透谷の平和運動と平和思想 (「日本の平和思想 明治・大正・昭和の平和思想家たち」ミネルヴァ書房、昭47・4)

日本文壇ドキュメント裏面史 新聞・追悼号にみる「作家の死」「作家の死」(「新評判冊」第5巻第3号、昭47・8) 「北村透谷氏 神経病のはての縊死」(「東京朝日新聞」明27・5・17) を収録

志村士郎 泰明小学校 (『東京文学百景』有峰書店、昭47・9)

加藤忠彦 北村透谷著『エマルソン』考察―明治の近代化― (「人文科学年報」第3号、昭48・3)

北村透谷 (フランク・B・ギブニー編『ブリタニカ国際大百科事典小項目事典』2、ティビーエス・ブタニカ、昭48・6)

平岡敏夫 北村透谷 (相賀徹夫編『万有百科事典』1 (文学)、小学館、昭48・8)

佐藤泰正 現代日本文学とキリスト教 (「基督教文化学会年報」No.19 〈現代とキリスト教〉、昭48・10)

中嶋美鈴 回想 父福田正夫―北村透谷記念碑設立について― (「焰」第22号、昭48・10)

剣持武彦 劇詩と叙事詩 (村野四郎ほか編『講座日本現代詩史』1 〈明治期〉、右文書院、昭48・12) 「劇詩

『蓬萊曲』の問題」を含む

杉本邦子 文学界〈明治詩誌解題〉(同右) ↓ 『明治の
文芸雑誌―その軌跡を辿る―』明治書院、平11・2

室伏 勇 北村透谷の水戸来訪(室伏勇著、茨城新聞社
編『文学のふるさと』茨城のこころ) 昭和書院、昭
49・1)

後藤卓三 近代文学の出発点(同右)

森山光章 『詩』的作品における意味作用機制の一般Ⅱ
特殊論的研究のための試論(Ⅰ)―北村透谷「雙蝶の
わかれ」を分析対象にして―(『帝京国文』第5号、
昭50・1)

川崎 敏 北村透谷の『富嶽の詩神を思ふ』(『富士箱根』
木耳社、昭50・2)

佐藤善也 キリスト教の受容と近代文学(紅野敏郎ほか
編『現代文学講座』1〈明治の文学Ⅰ〉、〈解釈と鑑賞
別冊〉至文堂、昭50・2)

松本健一 北村透谷とラスコリーニコフ(『ドストエフ
スキイと日本人』〈朝日選書37〉朝日新聞社、昭50・
5)

鮎川信夫・吉本隆明・大岡 信〈討議〉明治期の詩の
諸問題 透谷、藤村から有明まで〈近代詩再検討Ⅱ〉
〔現代詩手帖〕第18巻第9号、昭50・9)

越智治雄 近代文学の黎明(越智治雄ほか著『日本の近
代文学 明治・大正期』〈NHK市民大学叢書36〉日
本放送出版協会、昭51・2)『蓬萊曲』の世界像」を

含む

植田康夫 北村透谷―「我事終れり」と……(『病める
昭和文壇史―自殺作家に見る暗黒世界』エルム、昭51・
5)

水谷昭夫 愛の問題―近代日本文学における「愛」の視
点―(『基督教文化学会年報』No.21・22〈文学にみる
日本人の人間理解〉、昭51・7)

笹淵友一 日本文学における自然と人間―本居宣長と北
村透谷を中心に―(同右)

原島 正 日本教会史―透谷・鑑三の場合―(『日本の
神学』15、昭51・10)

千谷七郎 芸術家と狂気(『正論』第37号、昭52・2)
目次副題は「ゴッホ・漱石・龍之介・透谷」

飛鳥井雅道 近代の相克(川崎庸之・奈良本辰也編『日
本文学史』(2)〈近世・近代〉、〈有斐閣新書〉有斐閣、
昭52・9)「透谷の位置」を含む

坂上博一 明治二十年代の文学(『近代日本文学の歴史』
桜楓社、昭52・9)「文学界」の創刊「北村透谷の
活躍」「文学界」の変質」を含む

北村透谷(朝倉治彦・井門寛編『文学碑辞典』
東京堂出版、昭52・9)

平岡敏夫 人生相渉論争(日本近代文学館編『日本近代
文学大事典』第4巻〈事項〉、講談社、昭52・11)

奥野健男 文学者の自殺(同右)
石丸 久 「三籟」(日本近代文学館編『日本近代文学大

事典』第5巻〈新聞・雑誌〉、講談社、昭52・11)

榎林晃二「評論」(同右)

笹淵友一「文学界」／「平和」(同右)

隅谷三喜男 キリスト教と平和思想―明治期におけるその展開(『平和研究』第3号、昭53・5) ↓『日本プロテスタント史論』新教出版社、昭58・9

北川 透 透谷と現代 作品「塵と登高」を媒介にして(御沢昌弘・岡井隆・北川透著『空の空なる斜面 現代の詩と思想+講演記録集』へ北川透による北村透谷試論・全三巻完結記念) 幻原社、昭53・9)

鈴木 亨『楚囚之詩』と『蓬萊曲』―透谷の劇詩(分銅惇作・吉田熙生編『近代詩物語 明治・大正の詩的遺産を展望する』へ有斐閣ブックス) 有斐閣、昭53・10)

三好行雄 明治の青春―『文学界』の人びと(同右)

馬場伸也 Kitamura Tokoku: His Pursuit of Freedom and World Peace (馬場伸也・J・F・ハウズ編『Pacifism in Japan: The Christian and Socialist Tradition』シネルヴァ書房、昭53) 国会図書館本の受付印は昭53・8・9

佐々木雅発 「春」をめぐる青春と死―(『国文学研究』第68集、昭54・6) ↓『島崎藤村―『春』前後―』

審美社、平9・5

榎林晃二 北村透谷(人と文学／主要作品解説／「国民と思想」評価の変遷／主要参考文献)(長谷川泉ほか

編『資料による近代日本文学』明治書院、昭54・7)

山口 修 明治の文人と作品(神奈川県県民部県史編集室編『神奈川県史』通史編4〈近代・現代(1)〉、神奈川県、昭55・3)「北村透谷と小田原」を含む

佐々木雅発 「春」をめぐる作品世界の崩壊―(『文学年誌』第5号、昭55・7) ↓『島崎藤村―『春』前後―』審美社、平9・5

小松伸六 生の廃嫡者―明治・大正の自殺作家―(『美を見し人は―自殺作家の系譜―』講談社、昭56・2)

勝本清一郎 北村透谷(下中邦彦編『世界大百科事典』7、平凡社、昭56・4)

洪沢輝二郎 ブレスウェイト夫妻―日清戦争と非戦運動(『海舟とホイットニー―ある外国人宣教師の記録』テイビーエス・ブリタニカ、昭56・4)「平和論者の先駆―北村透谷」を含む

小田切秀雄 北村透谷『楚囚之詩』／北村透谷『蓬萊曲』(日本近代文学館編『日本近代文学名著事典』日本近代文学館、昭57・5)

佐藤善也 厭世詩家と女性／蓬萊曲(平凡社教育産業センター編『日本文学事典』平凡社、昭57・9)

―― 北村透谷(神奈川県県民部県史編集室編『神奈川県史』別編1〈人物〉、神奈川県、昭58・3)

生田武穂 透谷のインスピレーション(『生命の打出小槌』生田武穂、[昭58・5])

* 藤 一也 北村透谷(『現代詩研究』第12、13、21、22

号、昭59・2、8、63・8、平1・3)

明治の暗黒純文学(『幻想文学』第18号、昭62・5)〈特集 魔界とユートピア 日本幻想文学誌1 明治篇〉「宿魂鏡」の解説を含む

川村 湊 蓬萊と魔界―明治文学の神仙世界(同右)

中村雄二郎 西田幾多郎と小林秀雄―日本近代の〈経験〉と〈自己〉(『西田哲学の脱構築』岩波書店、昭62・9)

「北村透谷と西田」を含む

北村透谷(教育社編『新訂 日本重要人物事辞典』教育社、昭63・12)

【平成期】

笠原伸夫 北村透谷と馬琴(『文明開化の光と影』叢刊・日本の文学3)新典社、平1・5)

高橋 渡 北村透谷(『略年譜』作品解説／生涯と文学／文学入門・研究入門)(山田有策編『近代日本の詩歌』学術図書出版社、平2・4)「雙蝶のわかれ」を収録

竹田日出夫 北村透谷(作品解説(『厭世詩家と女性』「内部生命論」、生涯と文学、文学入門・研究入門ほか)(山田有策編『近代文学』I、学術図書出版社、平2・4)

巖谷大四 北村透谷(『かまくら文壇史―近代文学を極めた文士群像―』かまくら春秋社、平2・5)

佐川 章 北村透谷(『作家のペンネーム辞典』創拓社、平2・11)

横山吉男 泰明小学校(藤村・透谷在学記念碑)(『東海

道を歩く―東京の史跡散策案内』(『街道シリーズ1』

東京新聞出版局、平2・11)目次タイトルによる

加倉井東 若さについて―『藤村詩集』序と透谷・梅花・

鷗外―『茨高紀要』第14号、平3・1)

三浦雅士「青春の研究」序説(『へるめす』第36号、平

4・3)↓『批評という鬱』岩波書店、平13・9

内田四方蔵 北村透谷(小柴俊雄・内田四方蔵編『ヨコ

ハマ文学散歩』第39回(『西湘・小田原に近代文学を探索』、横浜文芸懇話会・横浜ペンクラブ、平4・5)

木股知史 北村透谷の自殺(『国文学』第38巻第6号、

平5・5、臨時増刊(明治・大正・昭和風俗文化史)「

「二八九四年(明治27)」のうち

藤 一也 藤村と透谷と一閑(及川和男ほか編『島崎藤

村と一閑』(島崎藤村一閑曾遊百年・没後五十年記念)文学の蔵設立委員会、平5・12)

佐々木邦 島崎藤村の一閑来遊をめぐって―小説『春』

を中心に―(同右)

度會好一 明治の恋文(『ラヴ・レター 性愛と結婚の

文化を読む』南雲堂、平6・8)

山脇文子 百年前の挫折者 北村透谷が清貧の時代に還

ってきた(『AERAリポート・文学』(『AERA』第7

巻第31号、平6・8・1)

栗原九十郎 透谷と谷口先生、そして美那夫人(『公評』

第31巻第8号、平6・9)

沢 英彦 漱石と同時代の「道義」意識―兆民・透谷・

西田幾多郎と漱石『漱石文学の愛の構造』冲積舎、平6・11)

三浦 仁 有明の周辺 詩語・詩想の継承(七) 付透谷と鉄幹・晩翠・『抒情詩』(山梨県立女子短期大学紀要)第28号、平7・3) ↓ 『詩の継承』新体詩抄』から朔太郎まで』おうふう、平10・11

小山文雄 「詩人」と「教師」―透谷によせて―(ねざす談義(6)) (『ねざす』No.15、平7・4)

谷沢永一 『透谷全集』書き入れ(『近代評論の構造』(日本近代文学研叢)和泉書院、平7・7) ↓ 『文豪たちの大喧嘩―鷗外・逍遙・橋牛』新潮社、平15・5

青木 健 北村透谷(『ポエム―名詩への招待―』電通、平7・9)

安宅夏夫 作品解説(大河内昭爾編『ふるさと文学館』第16巻(東京Ⅲ)、ぎょうせい、平7・9) 「三日幻境」を収録

谷沢永一 進歩的文化人の系譜 佐藤信淵と北村透谷が創始したイデオロギー的病い(『Voice』第213号、平7・9)

色川大吉 著者による解説(『新編明治精神史』(色川大吉著作集第1巻)筑摩書房、平7・10)

佐々木邦 島崎藤村の一関来遊をめぐって―『春』を中心に―(『文彦 啄木 藤村』北上書房、平8・1)

小長井晃子 『女学雑誌』にみる『恋愛』観の一面―巖本善治と青柳有美を中心に―(『国文目白』第35号、

平8・2) 「北村透谷の『恋愛』観」を含む

渥美饒児 「恋愛は人生の秘鑰なり…」 北村透谷に見る明治の恋愛観(『中日新聞』平8・4・4夕刊)

松本三之介 「天下国家」から「生活」への視座の転換(『明治思想史―近代国家の創設から個の覚醒まで―』(ロンド叢書5)新曜社、平8・5)

川村邦光 透谷、処女を論ず(『セクシュアリティの近代』(講談社選書メチエ86)講談社、平8・9)

峰島旭雄 社会思想と恋愛と宗教(『北村透谷』(峰島旭雄編著『近代日本思想史の群像―早稲田とその周辺―』北樹出版、平9・6)

北村透谷(岩井寛編『作家の臨終・墓碑事典』東京堂出版、平9・6)

*野口孝一 文芸雑誌『文学界』の作家たち(『区内散歩』(『区のお知らせ 中央』(東京都中央区) No.763、765、767、平9・9・15、10・15、11・15)

北村透谷(朝尾直弘ほか編『角川新版 日本史辞典』角川書店、平9・9)

内田四方蔵 戸部・野毛の詩人たち(横浜文芸懇話会編『ヨコハマ文学散歩』第44回(神奈川元袖ヶ浦の丘に文学を訪ねて)、横浜文芸懇話会、平9・10) 「北村透谷」を含む

石原 武 近代詩の成立と英詩―バイロンの受容を中心に―(阿毛久芳ほか編『日本現代詩研究論集』日本現代詩研究者国際ネットワーク、平10・3)

橋浦洋志 「蓬萊曲」の〈たま〉—〈詩人〉の在処—

(同右)

橋浦洋志 北村透谷の〈優美〉(橋浦兵一編著『ことはとの邂逅』開文社出版、平10・4)

和氣久明 Romanticism and Freedom of Thought:

Ralph Waldo Emerson in Kitamura Tokoku (北海道アメリカ文学) 第15号、平11・3)

北村透谷(石上英一ほか編『岩波 日本史辞典』岩波書店、平11・10)

上田 博 『東西南北』の可能性(『与謝野寛・晶子心の遠景』嵯峨野書院、平12・9)「北村透谷が見える」
「人生に相渉るとは」を含む

福田美鈴 小澤勝美『透谷・漱石・独立の精神』を読む
『書評』(『神静民報』平13・4・14)↓『文苑西さがみ』制作委員会編『文苑西さがみ』《神静文芸》2000

1年作品集』神静民報社、平15・10
永瀨朋枝 透谷の読者—藤村『春』が出るまで—(京都

大学文学部国語学国文学研究室編『近世文学・近代文学論集』へ日野龍夫教授退官記念) 中央図書出版社、平15・3)

小谷野敦 解説(北村透谷「厭世詩家と女性」抄/北村透谷「粹を論じて」伽羅枕」に及ぶ)抄(小谷野敦編『恋愛論アンソロジー ソクラテスから井上章一まで』《中公文庫》中央公論新社、平15・10)
村瀬裕也 近代の開始と平和思想(『東洋の平和思想』

青木書店、平15・11)

籠谷典子 北村透谷終焉の地(籠谷典子編著『東京一〇〇〇〇歩ウォーキング 文学と歴史を巡る』No.8《港区芝公園・飯倉コース》、真珠書院、平16・6)

下山嬢子『文学界』と仲間達(『島崎藤村—人と文学』《日本の作家100人》勉誠出版、平16・10)

佐藤 毅 小島鳥水の北村透谷受容—理想主義文学の一変形—(『江戸川短期大学紀要』第20号、平17・3)

水野達朗 エマソンの「非連続」的様式と日本におけるその受容(『アメリカ研究』39、平17・3)

鶴巻孝雄 北村透谷(町田地方史研究会編『町田歴史人物事典』小島資料館、平17・4)

橋詰静子『富士山トボグラフィ—透谷・正秋・康成らの旅』《執筆ノート》(『日本近代文学』第72集、平17・5)

正津 勉 北村透谷 過ぎにし春は夢なれど(『詩人の死1』《表現者》創刊号、平17・7)

内田 寛 北村透谷『蓬萊曲』論(『語文と教育』第19号、平17・8)

鹿野政直 北村透谷(『近代社会と格闘した思想家たち』《岩波ジュニア新書517》岩波書店、平17・9)

佐藤文明 石阪美那と北村透谷(『未完の「多摩共和国」新選組と民権の郷』凱風社、平17・9)

伊藤雄志 人間精神の抑圧と解放(『ナショナルリズムと歴史論争—山路愛山とその時代—』風間書房、平17・

10)「山路愛山と北村透谷」「保守主義批判」「啓蒙主義批判」「人生における「文学」の意義」を含む

* 福田美鈴 北村透谷碑とチェ・ヨンのこと(「トスキナア」第25号、平17・10、18・4、19・4) 紹介・崔然詩集『憂鬱の世界』／福田正夫・金井新作・加藤一夫・資料／北村透谷碑援助名簿 在京有志／碑建立の経過と費用

菊池有希 芭蕉とバイロンをつなぐもの―北村透谷の「自然―詩人」観―(「比較文学研究」第86号、平17・11)

小谷野敦 明治二十年代「恋愛」論の種々相―布川孫市の『相思恋愛之現象』その他―(「文学」第6巻第6号、平17・11)

―― 北村透谷(日外アソシエーツ編集部編『日本の思想家―時代の潮流を創った思想家・伝記目録』日外アソシエーツ、平17・11)

五十里文映 透谷の〈無限〉、藤村の〈無常〉―島崎藤村「山家ものがたり」論―(「稿本近代文学」第30集、平17・12)

尾西康充 北村透谷と斎藤緑雨―緑雨没後一〇〇年を迎えて―(「近代文学試論」第42号、平17・12) ↓『北村透谷研究―〈内部生命〉と近代日本キリスト教―』双文社出版、平18・7

黒田俊太郎 明治三五年版『透谷全集』―その「商品」性と流通ネットワーク(「三田国文」第42号、平17・

12)

堀部茂樹 北村透谷の詩と思想としての〈恋愛〉(「エタキス」vol. 2、平17・12)

2 平成十八年

半藤一利 先駆的な恋に生きた北村透谷(『恋の手紙 愛の手紙』〈文春新書493〉文芸春秋、平18・2)

平岡敏夫 〈夕暮れ〉と佐幕派の文学(「芸文放」第11号、平18・2)

桶谷秀昭 北村透谷(『日本人の遺訓』〈文春新書495〉文芸春秋、平18・3)

小澤勝美 明治二十五年の透谷と漱石―列強帝国主義への後追いを拒否する二人の思想―(「近代文学研究」第23号、平18・3)

尾西康充 北村透谷「内部生命論」の命脈―内部自覚運動を参照点にして―(「キリスト教文芸」第22輯、平18・3) 発行日は裏表紙による。 ↓『北村透谷研究―〈内部生命〉と近代日本キリスト教―』双文社出版、平18・7

尾西康充 「楚囚之詩」論―北村透谷における「自己処罰」―(「国文学放」第189号、平18・3) ↓『北村透谷研究―〈内部生命〉と近代日本キリスト教―』双文社出版、平18・7

菊池有希 発心するマンフレッド、悔い改める文覚―北

村透谷の「心機妙変」観——〔比較文学〕第48巻、平18・3)

九里順子『明治詩史論——透谷・羽衣・敏を視座として——』〔近代文学研究叢刊32〕(和泉書院、平18・3・20)

坂口満宏 雑誌『平和』をめぐる人々——「日本平和会」の新史料とともに——〔研究ノート〕(京都女子大学大学院文学研究科研究紀要)史学編、第5号、平18・3)

新保祐司編『北村透谷——『批評』の誕生——』(国文学解釈と鑑賞)別冊(至文堂、平18・3・15)

西田谷洋 北村透谷『楚囚之詩』における概念隱喩の構造(『国語国文学報』第64集、平18・3)

橋浦洋志 北村透谷の詩的領域寛書き(下)(『茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学、芸術)』第55号、平18・3)

伴 悦 泡鳴とエマソン——透谷との関連で——(『岩野

泡鳴文学の生成』おうふう、平18・3)

新保祐司 透谷の「眼高」今は希薄 批評は知識と情報

の飽食に(『読売新聞』平18・3・14夕刊)

〔楚囚〕 北村透谷再評価(『大波小波』(『東京新聞』平18・4・7夕刊)

鈴木一正 北村透谷参考文献目録(25)——平成十七年——

〔時空〕第26号、平18・5)

谷沢永一 三好行雄との論争／『文豪たちの大喧嘩』を上梓(『執筆論』東洋経済新報社、平18・5)

小田原出身の北村透谷を偲ぶ 16日に高長寺

で「透谷祭」(『神静民報』平18・5・10)〔新聞記事〕桶谷秀昭 回想(『北村透谷研究』第17号、平18・6)

宮里立士 透谷の文脈(同右)

坂口博志 透谷病——勝本清一郎覚書(同右)

塚本章子 緑雨・「死」と「再生」のアフォリズム(同右)

平岡敏夫 透谷に寄せる詩三編(同右)「一輪花の咲けかしと」(『門ちゃんの記憶』「夕暮れの惨劇」)

高橋直美 第二十八回北村透谷研究会全国大会報告(同右)

鈴木一正 透谷と「平和」関係参考文献目録(同右)

尾西康充 キリスト教文学としての「蓬萊曲」——「ハムレット」との比較を通して——(『三重大学日本語文学』第17号、平18・6)↓『北村透谷研究——内部生命』と近代日本キリスト教——(双文社出版、平18・7)

堀部茂樹 北村透谷の詩と思想としての(『恋愛』Ⅲ(『エタキス』vol.3、平18・6)

北村透谷(『平和人物大事典』刊行会編著『平和人物大事典』日本図書センター、平18・6)

北村透谷研究会の全国大会 あす3日文京区の東洋大学で開催(『神静民報』平18・6・2)〔新聞記事〕

尾西康充『北村透谷研究——内部生命』と近代日本キリスト教——(双文社出版、平18・7・10)

Michaela Manke-Hwang 北村透谷におけるトランス・

カルチャー的表象生産―国家・文化・ジェンダー言説との絡み合いを考慮して―〔FUKUOKA UNESCO〕第42号、平18・7)

村山富市 藤村、透谷を愛読 雑誌に投稿〈時代の証言者3〉〔読売新聞〕平18・7・26朝刊)

菊池有希 北村透谷「一夕観」におけるバイロン受容―『チャイルド・ハロルドの巡礼』の視点から〔超域文化科学紀要〕第11号、平18・9)

清水瑞久 北村透谷の生命思想 「力としての自然」を中心として〔社会思想史研究〕No.30、平18・9)

関口安義 尾西康充著『北村透谷研究―〈内部生命〉と近代日本キリスト教―』〔書評〕〔週刊読書人〕平18・9・1)

井上 謙 城下は多士濟々〔横浜・鎌倉・湘南を歩く〕〈NHKカルチャーアワー 文学探訪〉日本放送出版協会、平18・10) ラジオ第2放送テキスト

北村透谷(町田市民文学館 ことばらんど編『ことばの森の住人たち―町田ゆかりの文学者』町田市民文学館 ことばらんど、平18・10)

勝原晴希 九里順子著『明治詩史論―透谷・羽衣・敏を視座として』〔書評〕〔日本文学〕第55巻第11号、平18・11)

鈴木一正 北村透谷と坪内逍遙(上)〈透谷研究ノート2〉〔時空〕第27号、平18・11)

堀部茂樹 北村透谷の詩と思想としての〈恋愛〉IV

〔「エタキス」vol.4、平18・11)

九里順子 尾西康充著『北村透谷研究―〈内部生命〉と近代日本キリスト教―』〔書評〕〔日本文学〕第55巻第12号、平18・12)

沼 謙吉 「北村透谷の読書会の記録」を通しての思い出〈追悼 渡邊獎先生〉〔町田地方史研究〕第18号、平18・12)

福岡哲司 蒙軒学舎とその時代―山梨における明治初年の洋学塾―〔近代山梨の光と影〕〈山日ライブラリー〉山梨日日新聞社、平18・12)「はじめに―北村透谷から近藤喜則へ」〔ドクトル・イビーの来塾〕を含む

付記

これまで本誌第26号(平12・3)から第34号(本号)まで、九回連続で書誌を掲載してきた。結果的に、透谷に始まり透谷に終わる”ことになった。最初に掲載した時から、そうなることを願っていた。透谷文献探索の旅はこれからも続けるつもりであるが、これをもって一区切りとしたい。この三月で定年を迎えることになり、本誌への掲載は、これが最後となったが、掲載の機会を与えていただいたことに感謝したい。